

# 曲り角

昭和57年10月 第3号

\*\*\*\*\*  
 \* 「曲り角」のまがりかど \*  
 \*\*\*\*\*

大阪教育大学 柏原 健三

体育心理学研究会会報「曲り角」を再読してみた。昭和42年度から55年度までの、14年間の体育心理学専門分科会の歩みを振り返ったわけである。「曲り角」は、「体育心理学は曲り角にきまっている」との問題意識を出発点として生まれた会報であり、随想、研究紹介、シンポジウムのテーマの解説の時事的な話題などについて、専門分野からの考察を内容としたものである。日本体育学会が発足して18年目の昭和42年、人間にたとえれば大学生になる時期に生まれた会報である。いわば体育心理学が、向かうべき課題を明らかにするような性格をもっていた時でもあった。

昭和46年、第22回体育学会の心理専門分科会には、「体育心理学研究の課題」がシンポジウムのテーマにとりあげられた。そこでは① スポーツとパーソナリティ、② 知覚運動学習、③ 集団の3領域に関する研究のあり方が討議された。しかし体育心理学の立場からは、実際に扱う運動技術の学習の問題にとり組む段階にきているのではなかろうかとの指摘がなされた。この46年度のシンポジウムを通して、あらたに「体育心理学とは何か」と自問するものであり、研究のモデルを他の学問に求めながらも、主体性をもった体育研究へと取り組む決意を促進させるものでもあった。大学生生活を終り、一人立ちする青年としての“体育心理学”

が自ら新たな決意を「曲り角」に示しているものと思われる。

こうした非常に積極的な姿勢が、その後もしばらく続いたが、最近はやや沈滞気味でもある。「曲り角」は当初、年に2、3回発行されていたが、近年は年に1回がやっとなのである。内容もシンポジウムの連絡が中心となり、内から沸き上がるような自己主張や、自己批判は見られず、一遍の会報に過ぎないものとなっている。学会発足から30数年、体育心理学会報「曲り角」もまがりかどにきた。安定した数年へと向う過渡期(メイヤー・エッケ)にある。それは将来への方向を定める重要な節目でもある。もとより体育心理学は、体育やスポーツにかゝわる研究であり、人間存在の次元で行動の意味をとらえていく必要がある。

イー・オリオン(季御寧)氏は、その著“「縮み」志向の日本人”のあとがきの中に、「つくられた文化」を分析するのではなく、文化をつっていく想像力の根を、その出発点を探り、たださなければならない。そしてその想像力でもっとも重要な特性が、ジョルジュ・ブーレなどが指摘している拡散と収縮の運動であると…。このような考えにもとづいて、日本の日本人の創りあげた文化を、「縮み志向」としてとりあげたけい眼には敬服すべきものがある。たとえば漢字をとり入れて、ひらがなをつくり出した

ように、日本では高度の文化を積極的に外に求めつつ、内においては外圧によることなく、自由に選択し、吸収して、文化を創り上げて現在にいたっている。しかし、とおからず日本は、外から求められようとしているのではなからうか？「縮み志向」の文化からも知見できる日本の文化の本質を洞察して、それに対応しなければならぬであろう。

\*\*\*\*\*  
 \*  
 \* 中京地区：運動心理学談話会の動向 \*  
 \*  
 \*\*\*\*\*

名古屋大学 猪俣 公宏

この談話会は、身体運動全般に関連した心理学的問題を討議する会として昭和54年に発足した。談話会は原則として月に一回の割で名古屋大学総合保健体育科学センターにて開催され、毎回指定された話題提供者によって、まず話題が提供され、その後、司会者を中心にして討論が行われる形式をとっている。現在までに提供された話題は主としてその話題提供者が携わってきた研究テーマが中心になっており、話題の内容もかなり専門的な性格をおびている。

以下にこれまでに提供された話題をあげてみる。

1. 身体運動の心理学的研究の系譜
2. モデリングについて
3. 達成動機づけ
4. 運動とパーソナリティ
5. タウ効果について
6. 周辺視知覚の問題
7. Visual Stability
8. バウムテスト
9. 動作視力について
10. 視力とERG
11. 運動のイメージ
12. Hypoxia と運動
13. スポーツマンシップ
14. 競技不安について
15. 中心視、周辺視とタイミング動作

細分化した狭い範囲の精細犀利な研究から得られた理論とその応用あるいは実践との関連を、大胆な Speculation を持ち言及する場が「曲り角」ではないだろうか。私はこのような Speculation を持つ者である。

#### 16. 出生順位とスポーツ参加

残念ながらこれらのすべてについて内容を紹介する余地がないので、ここでは特に最近の2つの話題を取り上げてみることにする。

##### I. 「中心視・周辺視とタイミング動作」

山田久恒(名古屋大学)

本研究は中心視と周辺視という異なる機能の連繋作用が周辺視でのタイミング動作の正確性にいかなる影響をおよぼすかについてみようとしたものであるが、本研究においては2つ以上の視対象に対する対応動作を必要とするスポーツ種目の学習ならびに指導に有用な示唆を与えてくれるような実験事態を組立て、一方を中心視し、他方を周辺視することによっておこる動体周辺視知覚の変容が周辺視タイミング動作におよぼす影響についてみた。その主な結果として、① 周辺視瞬間光覚視野については、特に動体指標に対する視野狭窄が著しかった。② 周辺視瞬間視力については、中心固視条件を加えた周辺視視力は著しく低下し、また大きな個人差もみられた。③ 周辺視反応時間については、いずれも中心視反応時間に比べ明らかに反応時間の増大が認められた。④ 2つの動体に対するタイミング誤差時間については、例えば2動体視標条件で2つの視標速度が異なるとき、それが等速の場合に比して誤差時間が増大することなどが見出された。

中心視と周辺視の連繫機能の眼生理学的知見は、現象的に把握できても、その生理的機序については推測の域をでていない。したがって、それがおよぼす反応動作の変容の要因を解明することは極めて困難である。さらに実験を重ねていきたい。

## II. 「出生順位とスポーツ参加」

武田 徹(中京大学)

人は家族の中に生まれ、成員相互の影響を強く受けながら成長する。兄弟姉妹の出生順位と性格傾向の関係を調べた研究は発達や教育の領域で多く報告されてきた。Schachter(1959)の説を肯定する形で、長子は次子、三子らとは身体的危険度の高いスポーツに対して認知や構えが慎重だという違いも報告されている。

わが国の一世帯当りの人数は既に昭和50年に3.45人と少ない。今年3年次の学生の場合(N=418)兄弟数2人の割合は61%に達していた。彼等が中学時代に選んだ競技種目を個人・集団(チーム)に分け、兄弟構成(2人以下と3人以上)との関係で見ると、兄弟の多い群は集団的ゲームに有意に多く所属していた。兄弟2人では、長子は次子より個人種目を好む傾向

がある。ただし、女子にこの違いはない。

次の世代の頃、家族の構造が変化し、ハードで集団的なスポーツに情熱を傾ける若者の層が薄くなり、恰格よい個人的プレイを求める層が厚く……などとはならないで欲しいものである。

さて、現在までの談話会をふりかえてみると、それぞれ積み重ねられた研究の成果なり、その成果に関連した事柄をテーマにして討論が繰り返されてきた点でお互いに研究の内容を理解しあい、視野を拡め、また研究の動機づけにもなってきたのではないかと思える。しかし一方ではまた問題もいろいろな点で生まれてきている。例えば、発表討論の形式のマンネリ化、また会員が少数であるため話題の内容が次第に限られてくるなどがあげられる。今後、このような問題を解決するため、従来の自己の研究を中心とした話題提供から、さらに新しい研究文献の紹介、他方面からの講師の招聘、他地区の研究会との接触、共同研究の推進など幅広いプログラムを取り入れながらこの談話会を発展させて行きたいと考えている。(文責 名古屋大学 猪俣公宏)(注)文中の山田、武田両氏の発表要旨は、それぞれ発表者によって提出された発表資料あるいはその要旨に基づいている。

\*\*\*\*\*  
\* \* \* \* \*  
\* 「アメリカ留学記」 \*  
\* \* \* \* \*  
\*\*\*\*\*

福岡大学 山本 勝 昭

1981年4月より一年間、大学の命によりペンシルバニア州立大、フロリダ州立大の研究室にそれぞれ約半年間研修を行った。Penn StateではDr. DM. Landero教授のスポーツ心理学研究室、F. S. Uではご存知Dr. RN. Singer教授の運動行動研究室、その間、オタワでの国際スポーツ心理学会に参加発表(猪俣氏と共同)、イリノイ大、オハイオ、ミシガン州立大、テキサス州立大、U. C. L. A. のそれぞれの研究室を視察しながら、車でアメリカ大陸を縦・横断したというのが今回の研修スケ

ジュールであった。

Penn Stateのランダース教授は、現在アリゾナ州立大の方に移られ、ドクターコース設立の為にスタッフとして活躍しておられる。

Penn State在中は、公私とも大変お世話になった。奥様のDova Landersは教え子にあたり、同じスポーツ心理学の研究者として、とくにモデリングの研究に業績がある。ランダース教授はイリノイ大で学位を取られ、同期では親友のレイナー・マートン教授がおられる。昨年ニューヨークタイムズにも紹介されたように、スポーツ

サイコロジストとしては若手研究者の筆頭に評価されている。ライフル射撃におけるバイオフィードバックの効果に関する研究を精力的に進めておられるが、因みに、彼はライフル射撃的中率及び発射時期と心拍との関係を調べ、その的中率の高い発射時期は、各心拍間にトリガーが引かれた時、最も良い成績が見られたと報告している。他、筋電、呼吸、脳波などのバイオフィードバック効果に関する実験研究は有名である。

教授の生活で感心したことは、朝食ぬき、昼はコークの飲料水コップ一杯、研究の合間に近くの36ホール大学のゴルフ場のまわりを軽く2〜3週、その後、講義、院生の指導と過密スケジュールを精力的に消化しておられた。40才を少し越えた年代で、しかもあの少食であのスタミナは、胃袋を満たすだけの大量でまた量的には我々日本人の2〜3杯は軽く平らげる、一般的アメリカ人のイメージから遠く離れていた。ただひたすらに、マラソンランナーのごとく、人生の目標に向けて走りつづける姿は、今日、日本人が忘れていた何かを学べるものがあった。また、彼は、J. of Sports Psychologyの編集者でもある。世界各地から送られてくる国際スポーツ心理学会への情報を正しい英語に校正しておられた。一番修正しなければならない原稿は、ソ連、日本、中国、西ドイツの順だったように思う。Penn Stateはmotor learningのクリステナ教授、ドロシーハリス教授、バイオメカニクスのネルソン教授、生理のモアークス教授らがおられ、そのころ、この体育学部は全米一のランキングに評価されていたとのことであった。この他、Penn Stateでの理工学部日本入学者の活躍が目立ったことを付記しておく。

次にオタワでの国際スポーツ心理学会については、近大の森脇先生より報告があったと思う。開催国のカナダ、米国について日本の参加者が多かった。各種目の一線級のコーチの参加が目

立ったことは、この分野におけるコーチの期待と関心が高いことを示している。少数グループ単位でのデスクッション、シンポジウムなど、英会話力不足の為、悔まれることが多かった。自己の努力の足りなさ、10年以上も英語を学んできたのに通用しなかった。過去の英語教育に対して批判したいくらいであった。

その後ダンボール30個ほどに荷物をまとめUホールの車をレンタルし、車の後に牽引して、フロリダ州立大のある州都タラハッチーに4泊5日で到着した。オタワでの学会後、Dr. Singer教授の招きで来られていた藤田厚先生と合流できた。夜はバドワイザー、バーボンを飲み、10日間程、先生の御人柄にふれることができ、楽しいひとときであった。シンガー教授とは、二年前のアメリカ研修の際猪俣先生からの紹介で知り合い、今回の研修について、東京の学会の折、「暑い時は北の方で学び、寒くなったらこちらの方へと」アドバイスを頂いていた。やさしい笑顔と自然に細かい心配りができる、自由な雰囲気は、肩のこらない気分だと思う。彼のオフィスを活用させてもらった。彼の大学院の講義を聴講できたこと、Perceptual Motor skill & Psychological Reportsに投稿するにあたって、気楽に助力してくれたこと、など感謝すべきことが多い。その雑誌の編集長であるアモンズ教授やスタッフからの3回もの原稿校正は3ヶ月程の期間を要した。今回で終りかなと思い、この校正は日本にてと同封した手紙と一緒に投函した後、レンタカーでアメリカ横断の旅に出て、日本に帰国し、受諾の報に接した時は、まさに、嗚呼、劇的、感激であった。研修の終り2週間は、各大学の体育施設研究室及び各名所を訪ねての旅であった。ニューオーリンズ・ヒューストンデンバー・フェニックス、グランドキャニオン・ロス・サンジェゴなどの観光地を訪ね、各州を横断しているとその州の特色などが思い出される。テキサスの石油井戸、全方位すべて地平線の綿花畑、二時

間程走ってクーラから暖房に切り変えたコロラド・ロッキーの山々の緑、水、空気、雪、ニューメキシコ、アリゾナのユニックな地形、グランドキャニオンのあの広大な空間、すべからく広大で豊かな自然は、車を走らせていると、つくづく豊かな農業国としてのアメリカを感じる。アリゾナ州立大でのランダース一家との再会、U. C. L. A. での Motor Control 実験室の視察を終え、サンジェゴの岬に立ち太平洋の海を

見た時、アメリカでお世話になった方々を思い出しながら、国際交流の為には、一方的情報蒐集よりも、日本の資料紹介、研究交換、政治、経済レベルよりも、教育、民間レベルでの交流を深めることこそ、大切かと思われた。自分達が逆の立場に立たされたとき、あれほどお世話でき、よい思い出をみやげに good bye できる余裕があるかと思うと、まだまだアメリカを越えていない感がした。

\*\*\*\*\*  
\* 運動場面における勇気に関する因子分析的研究 \*  
\* \*\*\*\*\*

神戸市立桜ヶ丘小学校 井 関 典 子

I. 目的：身体活動では、緊張したり危険を冒したりすると“怖い”と思うことがある。そのような状態での運動は思い切りが悪くなったりそれとは逆に能力不足を顧みずに猛進して怪我をする場合がある。……スキー実習の2日目、身のすくむような上級コースに連れて行かれた。そのときの指導者はスキー上達の秘訣として、「一に勇気、二に装備、三・四がなく、五に技術」と述べ、初心者の一群を兎に角も下まで降ろしてしまった。後で考えれば、技術学習以前の心理的効果一場の認知（斜面と技術不足に対する不安や恐怖）—体験（勇気・決断・実行）—自己の再体制化（自身・意欲・工夫）を狙った指導の一つであることが理解される。蛮勇は困るが、清水の舞台から飛び降りてみる勇気は行動力の発現に大きな寄与を果している。そこで本研究では、恐怖場面に遭遇したときに合理的に危険を処理し、現実的勇気をもたせるための指導の基礎的段階として、運動場面における勇気の実態を次の観点から検討することを目的として取り組んだ。

運動の好嫌、成績、危機・緊張体験など8項目について

II. 方法：1. 一次調査：昭和56年7月。運動場面での勇気に関する調査票を作成するために中学生354名を対象とし、運動に対して恐怖を体験した時期、場面、理由、反応を、また勇気を必要とする状態について自由記述法で回答させた。

2. 二次調査：昭和56年11月～12月。調査対象に学年3群（中1～3年）、性差2群、環境条件3群（農村、商工、住宅）計18群を設定し、各小群30名、合計540名。5段階評定尺度形式の回答方法による110項目からなる質問紙を作成し、危機・緊張体験の有無、勇気の度合の評定、運動に関する個人的特性について回答を求めた。

3. データ処理：①大阪教育大学及び京都大学大型電算機U-400を使用し主因子法からバリマックス回転によって因子負荷を求める因子分析手法を適用。

②因子別、項目要因別（環境、学年など13群）因子スコアの分散の同質性をバートレット法によって確認・修正後、各群別に2要因分散分析を行った。

③危機・緊張体験の経験群、未経験群別度数と百分率を110項目別に算出した後、 $\chi^2$ -検定を

1. “こわさ”をのりこえる勇気について—勇気の定義とそれを規制する要因の把握
2. 環境、学年、性差による勇気の現れ方のちがいを
3. 運動に関する個人的特性と勇気との関係—

行った。

Ⅲ 結果と考察：1. 心理学、生理学説あわせて11説を参考に「情動」として捉えた上で次のように「勇気」を定義した。「勇気は、自己の存在を脅かす対象が存在したり、状況が起こったとき、それがどのように自分に影響するかを判断し、それを処理する自己の能力を満足させるという評価に伴って現れる積極的情動である」。

因子分析の結果、累積因子寄与率は27.5%と低いが明確に解釈できる4因子を抽出した。寄与率の高いものから、第1恐怖場面回避因子、第2恐怖場面克服因子、第3受容因子、第4危惧因子と命名した。これらは、運動に伴う恐さ場面に対して子ども達が回避—危惧—受容—克服の4順序尺度上で反応していることを示すものである。

2. 因子スコアからみた分散分析の結果、各因子とも環境差は認められなかった。これは現代社会の生活、文化レベルに極端な違いがないためと考えられる。学年別にみると、回避・危惧因子に差が認められ、低学年ほど回避よりも危惧する傾向がある。また、恐怖場面の受容には性差が顕著に現われ、男子は怖さを受け入れた上で行動しようとするのに対して、女子はその姿勢が乏しかった。

3. 個人的特性との関連をみると、①運動が嫌い、不得意、下手という意識をもつものは性差に関係なく怖い場面を回避し、克服しようとせず、危惧する傾向がある。②運動体験や危機・緊張体験の多いものは恐怖場面を克服しようとする構えが強い。しかし、緊張体験の多すぎる者と少なすぎる者は回避傾向が強い。③女子は男子に比べて受容因子に強く反応する。すなわち運動の好嫌などに関係なく怖がりが多い。④体格面では闘士型の体型者は、瘦身型、肥満型よりも克服因子に反応する。⑤運動に関しては特技をもつ者、体育の成績がよい者は、運動恐怖を特に意識しない、すなわち、危惧し回避するよりも克服しようとする傾向が認められた。

Ⅳ 展望：本研究では運動において怖いと思う場面に遭遇したとき、どのような反応をとるかを日常語の範疇にある「勇気」という語を基に考察したが、勇気は単純に説明しきれない大きな概念であり、人間の全人格にかかわる最高の情動のような気がする。すなわち人間であるが

ために可能性の実現をめざし、自己を拡張していく、その際に必要な情動である。従って自己破壊的な行為に導く情動は見かけは勇気のようにみえても真の勇気＝現実的勇気とはいえない。しかし、どこからどこまでがその人にとって現実的勇気であるのかは簡単に決められるものではなく、自己の能力的確な判断を期待するしかない。従って指導場面ではあくまでも可能性の実現をめざし、自己拡張していく態度、すなわち運動に対して積極的な態度を養い、危機・緊張体験を積むことによって自信を築き上げていくようにしてやりたいものである。

## 事務局より

従来、会費は、体育学会時の体育心理学専門分科会の総会においてのみ、その席上で納入して頂いておりました。この方式の不備を補うために、郵便振替を利用することにして次の口座を開設しますので御利用下さい。

加入者名

日本体育学会体育心理学専門分科会

住 所

〒581 八尾市山本町南7-9-323

船越方

口座番号 大阪1-13179

年会費 500円

新入会費 500円

## 体育心理学会会報

「曲り角」

昭和57年10月31日発行

代表 柏原健三

編集 船越正康

連絡先 〒563 池田市城南3-1-1

大阪体育大学池田分校体育学教室

体育心理学専門分科会事務局

電話 0727(51)8331(内)41